

当院におけるニキビ治療

川口スキンクリニック 院長 青柳 玲

キーワード

- ニキビ治療
- スキンケア
- 瘀血
- 十味敗毒湯

当院では、スキンケアと漢方治療を、ニキビ治療の二本の柱としている。ここでは特に漢方治療について、駆瘀血、消炎・感染抑制、抗ストレスの3つの治療目標ごとに典型的な処方を紹介し、ニキビに対する随証治療を確立する一助としたい。

はじめに

ニキビは皮膚科に限らずごく一般的な疾患である。しかし、その認知度にも関わらず、治療法は確立されているとは言い難い。そのため、アトピー同様に、都市伝説ともいえるあやふやな情報、効果不明な商品、民間療法を始めとする治療法が満ちあふれている。

一方、医療としての治療では、最近アダパレン、クリンダマイシン外用など新しい薬剤が発売されたものの、基本的には、抗生剤の内外用、ビタミン剤内服が主流であることには変わりがない。しかし、抗生剤による治療はあくまでも感染に対する予防、治療であり、コメドができるという状態の根本的な改善になっていないのも事実である。

そこで当院ではこうした薬を併用しつつ、コメド自体の発生を予防すべく、これ以外の治療法を組み合わせている。大きな柱は二本あり、一つはスキンケア、もう一つは漢方薬による治療である。

スキンケアによるニキビ治療

当院で最も重要視しているのはスキンケアである。具体的な方法は紙面の都合で割愛させていただくが、簡単に言えば皮脂を過剰に落とすすぎない洗顔法である。

一般的には、ニキビ＝皮脂過剰＝洗顔不足という公式ができており、その結果、洗顔過多→乾燥肌→反応性皮脂分泌過多→洗顔過多、という悪循環状態になっているケースが多い。また、市販されているニキビ用の洗顔剤などは必要以上に脱脂するタイプのもが多く、乾燥肌、ニキビの悪化の原因になっ

ていることが多い。

そのため、正しい洗顔法を身につけるだけでもこの悪循環を改善し、症状改善を認める。ただし、正しい洗顔法は言葉だけでは伝わりにくく、必ず実践して教えないければならないので、指導する人間、場所が必要であり、一般的な診療所では取り組みにくいという難点がある。

漢方によるニキビ治療

当院でのニキビ治療のもう一つの柱が漢方治療である。ニキビの初診時には、食生活や治療歴など一般的な質問の他に、便秘、冷え性、女性の場合は月経周期、月経前症候群の有無など瘀血に関する質問、さらに睡眠時間帯、入眠困難がないか、ストレスの軽重など気に関する質問なども行っている。

ニキビの治療に用いる漢方は、荊芥連翹湯、清上防風湯の二剤が一般的であるが、当院ではニキビだというだけでこの二剤を投与することはなく、使用頻度は低い。

当院でニキビによく投与する漢方を目的により大きく分けると、1) 駆瘀血、2) 消炎・感染抑制、3) 抗ストレス、の三つに分けられる。

1) 駆瘀血

思春期だけではなく、月経時にニキビが悪化するケースは少なくない。こうした場合、いわゆる瘀血の症状の有無にとらわれず駆瘀血剤を投与することが大半である。逆に月経周期とニキビとの関連があるようだったら、瘀血の症状を自覚していなくても駆瘀血剤の投与を行っている。

男性でも冷え性や便秘異常などの症状がある場合

や、ニキビの発生にライフスタイルによらない明らかな波がある場合も、駆瘀血剤の投与を行うことがある。私見ではあるが、ニキビ自体が瘀血の一つの症状と考えるべきではないか、また男性も女性同様に数ヵ月単位での性周期があるのではないかと思う。

駆瘀血剤として使用する頻度が高いものは桂枝茯苓丸である。ただ、冷え性のある患者の場合10月頃から当帰四逆加呉茱萸生姜湯に変えたり、便秘がある患者の場合は桃核承気湯を用いたり、あまりニキビという症状だけにとらわれないようにしている。

また、月経困難症や月経不順を持つ患者の場合、すでに婦人科で漢方薬を投与されていることもある。しかし、婦人科で投与されている場合当帰芍薬散が漫然と処方されていることが多く、「証」が合っていないのではないかとと思われるケースが多い。漢方が処方されていると聞いただけで納得せずに必ず確認すべきであり、実際に婦人科の先生と相談しながら処方を変えることも少なくない。

2) 消炎・感染抑制

抗生剤は従来のニキビの治療のように、長期にわたり投与することはしない。炎症がきわめて強い場合、セレモニーなどのために特定日時に炎症を抑えたいときなどに短期間に限定して投与している。炎症が強いニキビの場合には、十味敗毒湯を投与することが多い。

以前は個人的な手応えとして排膿散及湯の投与が多かったが、最近、桜皮エキスによるエストロゲン

産生亢進作用¹⁾が示唆されたために、桜皮エキスの入ったクラシエ十味敗毒湯の使用割合を増やしている。本剤は1日2回のスティックタイプや錠剤などもあり、患者のニーズに合わせて処方できるのもメリットである。皮脂分泌に拮抗的に作用するエストロゲンの産生が増加するのであれば、最終的には駆瘀血剤の使用量を減らすか、十味敗毒湯を中心にし、駆瘀血剤を補助にすることができるのではないかと期待される(図)。

3) 抗ストレス

ニキビに限らずストレスは肌トラブルの大きな要因の一つである。一方では、現代社会においてストレスなしに生活することは不可能に近い。

従来は進級、就職、転居など生活環境の変化があった際、仕事が多忙な時期などに明らかなストレスが多かった。しかし最近では、本人はストレスとして実感していない、恒常的な入眠困難、中途覚醒、易疲労感など、過緊張によるストレスの頻度が高い。

こうしたストレスに対してよく使うものは半夏厚朴湯と半夏瀉心湯の二剤である。ストレスに対しては半夏厚朴湯の方が使用頻度は高い。しかし最近、下顎から口周辺にニキビの多発している症例が多く、こうした症例には半夏瀉心湯を投与する。特に思春期以降の女性にこうした症例が多く、仕事のストレス、夜更かし、食生活の乱れが一因ではないかと思われる。

当然のことながら、これらの薬を必ずしも単独に使うわけではない。二剤投与しているケースが多いといえるくらいである。ただ、なるべく単剤の方がよいのはいうまでもない。今後は、エストロゲン効果の期待できる十味敗毒湯や、桃核承気湯のようにストレスにも効果があるものなど、複合的な効果を考え工夫する必要があると思う。

まとめ

当院でのニキビ治療の流れについてまとめてみた。ニキビの誘因、悪化素因は様々なため、ニキビという症状、現象にとらわれず、個々の症例に応じた治療法を工夫する必要があると考える。

【参考文献】

1) 目片秀明ほか：Freg. J. 34(8): p42-47, 2006.

図 痤瘡の原因と十味敗毒湯(桜皮配合)の推定される作用機序

